徳永英二助手，法政大の三井嘉都雄教授が長期滞在され，今も筑波大の田口氏が滞在中と聞いている。日本からの研究者の滞在がひき続くきっかけとなったのが，私の偶然からだったような気もしている。

余り雨の降らなかった昨秋，教授の日本訪問の結果は，多くの人々の協力で充分御満足のゆくものとなった。私は教授御夫妻を自分の車で，箱根，富士，甲府と二泊三日の間御案内した。秋晴れの富士の五合目付近の自然の姿には特に感動された様子であった。これでスウェーデンでお世話になった御恩にいくらかでも報いることができたのではないかと思った。学問や研究の世界でも，その根底には人の交流や人間関係の融和が必要なのだとつくづく思われる。（1978年1月15日）

女性と新聞

井内　昇

或るサラリーマン一年生とその母親との対話。

「女性が電車の中で新聞を読むのを見てどう思う？」

「道を歩いていて，二階の窓から見下ろしている犬と視線が合った時の気分になるよ」

「それ，どういう意味なの？」

「つまり，生意気だな，という感じさ」

これは昨年の秋頃，朝日新聞に載っていた，「女が電車で新聞を読むと」と題した小さな投稿記事の一節である。

この筆者（50才前後の婦人）は，最近は女性の市民運動への参加も活潑になり，意識もかなり違ってきたと思われるのに，車内で新聞を読んでいるのは男だけ，という風景が10年前と変らないのは，20代の若い男でさえこのような見方をしていることからもわかるように，男性上位の意識がなお社会的に根強く残っていて，そのような社会環境の中で女性が車内で新聞を拡げるにはかなり抵抗があるため，と解釈している。しかし，筆者はまた，その背景として，一日のうちで新聞に要する平均時間が女は男より少ない，という事実を挙げ，これは女の関心が家族や衣食住に向けられ，社会への関心がうすいからではないか，という疑問も投げかけている。

車内で新聞を読むことが適当かどうかは別として，この記事は私の興味をひいた。というのは，最近の女子学生諸君はあまり新聞を読まないのではないだろうか？　もしそうならそれは何故だろうか？と疑問に思っていたからである。

世はまさに情報の洪水の時代である。テレビ，ラジオ，その他マスメディアにはこと欠かないが，それらの中で一番質が高く，しかも新しい情報をとどけてくれる媒体として，現在，新聞に勝るものは無いであろう。新聞といえば，米国の元大統領アイゼンハウァーは，在任中，1週間にN.Y.タイムズ日曜版を眺めるだけであったが，次のケネディは速読術を身につけ，毎日20種近い新聞に目を通していたという。日本には，スポーツ記事しか読まない，と公言した総理大臣が居たが，日本の政治の程度が低い一因はその辺にあるのかも知れない。

前にも書いたが（17号），私は社会科学の領域を学ぶ学徒は，基礎的な学術書や古典を精読する

一方，現実の社会に生起するもろもろの事象にも絶えず目を向ける必要があると考えている。人文地理学も社会科学としての一面を持つと考えれば，全く同じことがいえるだろう。だから，新聞の中に関連テーマがあれば，客観的な資料であれ，解説・分析記事であれ，授業で教材の一部として利用することにしている。ところが，学生諸君はそれらの資料，記事が出ていたことを余り知らないようで，聞いてみるとその日の新聞を読んで来た学生は極めて少ないのである。

別に電車の中で読むことを奨めるつもりはないし，忙しい登校前に無理して読むにも及ばないであろう。しかし，この地球の上で人々が何を考え，どのように行動し，それらによって社会が現在どのような問題を抱えているのか，を正しくとらえるためにも，新聞を是非毎日読んでもらいたいと思っている。そのことが，間接的に地理学の学習への興味をよびおこし，その奥行を深めることにもつながるのではなかろうか。

同　窓　会

内藤博夫

八月の初めだったと思うが高校時代の友人で，中小企業の経営者となっているT君から電話がかかってきた。来年の３月で高校を卒業してから満２０年になるので，それを記念して同窓会を開きたい，ついては幹事の１人になってくれないか，というのである。２０周年と聞いてショックであったが，昭和３３年卒であるから５３年３月になれば確かに満２０年が経過したことになる。T君から同窓会の開催に協力してほしいと頼まれたときは，率直にいって大変なことになるなと思った。しかし旧友と再会することの意義は理解できたので引受けることにした。以来，幹事の集りは５回ほどもたれた。主な顔ぶれはT君のほかに運輸省勤務のA君，銀行マンのS君，商社員のN君，科学機器メーカーに務めているKさんらであった。パーティーの日時は５３年１月１５日の１時からときまった。会場は母校所在地，立川市のあるホテルのホールを借りることになった。形式は同期会として行なうことになったので，対象者は約４００人（男子３００人，女子１００人）である。最初に受持った仕事はパーティを予告する手紙の印刷とその印刷物を高校の同窓会担当の先生のもとに届けることであった。印刷物ができ上がったので，９月の初めに久しぶりに母校を訪ねた。久しぶりといっても，多分卒業後はじめて訪ねたことになるのだと思う。毎日のように中央線で通勤していながら，立川は通過するばかりであった。大学生を相手にしている日常のためか，構内で目にふれた高校生の表情がいかにもあどけなく思われた。

いよいよ１月１５日となった。この日はいうまでもなく成人の日である。我々が卒業した年に生まれた赤ん坊はこの日に成人式を迎えたのである。１０年ひと昔というが，ふた昔がすぎてしまったわけだ。当日はN君らと受付けをつとめることになった。開会の時刻が近づくにつれて，少し大げさにいえば全国から同期生が続々と集まってきた。受付けにいればどうしても多くの旧友とあいさつをかわすことになる。会費の徴収はそっちのけで話し込んでしまう場面がしばしばあった。何しろ２０年ぶりである。男子も女子もずいぶん変った。貫録のついた人もいれば高校生のときとほとんど